

けて、縄切れ、服切れを集め、冬わらぐつをつくっては、みんなに分けたら、市庁が「ハラショーパチンキ」と褒めたので、二十人くらいでわらぐつづくりをやることになって、死亡者も出なくなった。

収容所の近くには抑留死亡者の墓地があった。墓標のつもりか、白樺の木切れがあったので、その数を数えたら百八本だった。酷寒と飢餓に耐えられず、無念のうちに死んだであろう仲間の墓標に合掌しながらの伐採作業で、自らの運のよさに感謝するのだった。野牛や狼が墓を掘り起こすのか、遠吠えが夜半の寒気を通して伝わってくることもたびたびだった。

四年目の夏近くになって「ダモイ」といわれても、船で舞鶴の緑が見えるまでは不安な気持ちが続いてくるのだった。だまされて連れ返されはしないかの不安感だった。

ノルマに耐えて

新潟県 湯田 太郎

はじめに

私のシベリア抑留中の苦労を綴るに当たり、まずもってお許しいただきたいことは、小学生当時より綴り方（作文）は太の苦手でした。今でも変わりはないのですが、私としてはご協力できるのはこれくらいのことしかありません。

戦後四十年余を経て、戦後生まれが過半数を占める時代となった今日、悲惨な戦争の体験を語り継ぎ、二度と戦争のない世界にしたいという平和運動も起きておりますが、あたら青春時代を、国のため、天皇陛下のために命を捨てるのが、日本の繁栄につながることであるから、誇りと信念をもって戦ってこいと言われ、何も疑うこともなく、素直な気持ちで死生をとにした軍隊経験者。艱難辛苦を本当に理解してもらうことは、もはや困

難な時代になったのではないかと思います、外孫に年賀状でも出すつもりでペンをとりました。

終戦後、すでに四十年余を経過しておることでもあり、その記憶は全く断片的であり、正確なものにはほど遠いものがありますが、それらについてはご了解をいただき、思い出します、入隊時より復員までの間を綴って見たいと思います。

入隊のころ

昭和十八年十二月、召集兵として神奈川県陸軍兵器学校訓練隊へ入隊。兵技兵「後の技術兵」として基礎訓練を受けながら、翌十九年四月、満州へ転属になったのですが、その間の軍隊生活については省略させていただきます。

満州にて

十九年四月、転属になった所が、ソ満国境の満州第二六三六部隊、ハイラル野戦兵器廠でした。ここは軍隊と地方の工場が一緒になったようなところでした。毎日が工場通いで、地方より通って来られる軍属の人たちと一緒に火砲の修理や銃器の修理等に明け暮れる毎日でした。

が、やがて終戦を迎え、シベリアでの抑留生活が始まるわけです。

シベリアにて

終戦を満州の蒙家屯（このような名称でした）で迎え、武装解除をされ、シベリアのアングレンという地名の炭鉱のある集落でした。炭鉱より二、三キロはなれた所に収容所があり、そこに収容されたのです。

早速炭鉱要員と岡作業要員とに分けられ、早速翌日から炭坑通いが始まったわけです。私は第一炭坑要員で、それぞれ三交替制になっており、最初は第一班の昼間作業の朝八時から五時まででした。一組二十人くらいだったと思います。収容所を朝七時過ぎに警戒兵に守られながら出発、炭鉱に到着、入坑するのですが、当時はまだ石油ランプでした。しかも一人一個ではなく、二人に一個といった具合でした。

入坑前には、所長のような人から、当日のノルマが言い渡され、同時に地方人の炭坑夫に一人ずつの兵隊が組まされ、今後この炭坑夫と一緒に仕事をするのだと言われ、いよいよ入坑です。もちろん言葉はわかりませ

ん。手まねでどうやらエレベーターで下り、やっと切羽まで着きました。

これから採炭が始まるわけですが、お互いに名前もわかりません。上にいたときに所長に教えられたのですが、着くまでに忘れてしまいました。炭坑夫は「俺はブチコーフ、お前は」という具合に手まねで聞くので、「俺は湯田という名前だ」と言うと、ウンウンと言いながら地面に字で書いてくれました。今でも覚えております。ブチコーフもすぐに覚えたようでした。

すぐに粘土が足りないから取ってこいと言うのです。それはハッパをかけるときに使う粘土だったのです。それはエレベーターを降りてから途中で取ってきたものでした。私は思い出して、そこまで行って取ってきました。ブチコーフは喜んでハラショーを繰り返していました。翌日からは途中で取っていくようにしました。

初日からノルマは達成されました。翌日はもちろんノルマは増やされました。ノルマを達成すると、翌日のパンの量が多くなるわけですが、決してよいことばかりは続きませんでした。それは、二年過ぎくらいだったと思

います。落盤事故に遭ったのです。通路に落盤があったのです。前から危険な状態だったのですが、ノルマ、ノルマで補強することをしなかったので、遂に落盤したのです。

トロッコの音も聞こえないし、コンベアもとまり、不思議に思っただけで通路へ出て見ると、途中で落盤していること。みなで現場まで行って見ると、初めて見る落盤で、本当に驚きました。幅六、七メートルで、青空が見えるのではないかと思うほど大きな穴があき、通路は完全にふさがれてしまったのです。小さな落盤には前回も遭っておりましたが、こんな大きなのは初めてでしたので、もう駄目だと思いました。

さすが地方人は落盤事故にはなれていました。前にもこのような事故に遭ったことがあるから心配要らない、非常出口があるからと言うのです。この時分には片ことまじりではあったが、言葉はわかるようになっていました。ブチコーフは送風機を何回もたいていました。すると反対側からもたたく音が聞こえてきました。このとき、初めてみな顔が笑顔に変わりました。

ようやくにして非常階段を見つけました。それははしごを組んだようなものでした。三尺四方くらいの広さで、六、七メートル昇ると踊り場があり、またそれくらい昇ると踊り場があり、それを繰り返して何十メートル昇ったかは覚えておりません。地下水が出てはしごはツルツルすべり、踏みはずしたら真つ逆さまです。夢中で登りました。どれくらい時間がたったのかもわかりません。ようやく天井に光が見えてきました。

前後になりますが、当時はすでにランプではなく、充電式のバッテリーを腰につけ、電気は頭につけるものに変わっております。八時間は大丈夫ということでしたが、光が見えてきたころは、ほんのわずしか見えない状態でした。ようやくにして昇り終わって、出たところが、何と第三炭鉱のあるところでした。坑内でつながっておったわけです。

第一炭鉱まで下り、みなと一緒にになり、無事を喜び合い、帰路につきました。後始末は二番出、三番出の人たちがしたわけで、翌朝入ったら、きれいに片づいていました。どこに落盤があったのだろうと思うくらいで、相

変わらずノルマの繰り返しが続きました。そしてやがて復員を迎えるわけです。

終わりに

以上が私の短い軍隊歴に加えて、長い抑留生活の苦勞を綴って見たのですが、「はじめ」に述べたように、戦後四十年を経た今日、苦しみや恨みより、懐かしい思い出が先に立ち、どうしても苦勞話にならないのです。よくも生きて帰れたものだといまさらながら感謝しておるところです。

「はじめに」に述べたように、平和の今日あることを思うとき、あたら若い生命を国家のために犠牲にされた戦友。極寒のシベリアで不幸にして亡くなられた同胞のあったことを忘れてはならないと思います。ご冥福をお祈り申し上げます。